東北大 きょうかん

発　行
東北大学教育学部
関東地区同窓会

事務局
〒112-0006
文京区小日向2-25-6
（鬼　宗久方）
電話 03-3944-0450
FAX 03-3944-4132
onim4771@kkf.biglobe.ne.jp

ご挨拶
「ポジティブシンキング考」
―人生は楽しく、思いを形に―

東北大学教育学部関東地区同窓会会長
星　永揚（教育社会 '66年卒）

ロンドンオリンピックでの日本選手団の活躍に一喜一憂、寝不足気味になったのは約三ヶ月前。しかし、依然先行き不透明な日本経済、加えて昨今の政治停滞等、世の中全体に閉塞感の漂うこの頃ですが、「きょうかん」会員の皆様にはご健勝でお過ごしのことと思います。

我が同窓会も、今年で結成以来二十四年が経過し、着実に歩みを進めています。この間の皆様のご支援ご協力に心からお礼申し上げます。

母校の近況。今春就任の里見進総長が「ワールドクラスへの飛躍」「東北復興の先導」をテーマに掲げ、力強く改革と復興へ着手、更なる発展が期待されます。また、朝日新聞出版の「大学ランキング」に、高校からの「総合評価」は八年連続、「進学して伸びた」は六年連続で「日本一獲得」との記事。共に同窓として誇らしく思い、同時に関係各位のご努力に心から敬意を表します。

七月の関東地区萩友会で、川島隆太教授の「スマートエイジング～脳を知り脳を鍛える」との講演を聴き大いに啓発されました。アンチエイジングの言葉に潜むネガティブ発想の対極としてスマートエイジングを提唱、「高齢期は知的に成熟する人生の発展期」「加齢は人間の発達、積極的に受け入れ、楽しく年をとりましょう」等々、ポジティブ思考と意欲が掻き立てられる内容でした。具体策として、①脳を使う習慣をつける、②身体を動かす習慣をつける、③バランスの取れた栄養の摂取、④人と積極的に関わる、の四か条を伝授されました。皆様も是非お試しを。

人との積極的な関わりについて一言。私どもは、日常生活や仕事の面で同窓会組織・人脈（萩友会含む）をもっと活用すべきです。必ず人生の充実と向上に役立つからです。

同窓会の課題である、情報共有化、世代間交流、若手会員拡大等もポジティブシンキングで取組む所存です。

今総会では、昨年の東日本大震災で被災され、その復興に獅子奮迅の活躍をされている佐藤門哉様にご講演をお願いしました。遅々として復興の進まぬ被災地の現状を伺い、それぞれの立場で継続的な支援を考える機会としていただければ幸いです。多数の皆様のご参加を心からお待ちいたしております。

第12回　東北大学教育学部関東地区同窓会総会・懇親会のご案内

第12回総会・懇親会を下記のとおり開催いたします。懐かしい青春時代を共に杜の都仙台で過ごされた同窓生の皆様が旧交を温め、交流を広げるチャンスにしたいと思います。ご多用のこととは存じますが、是非ともご出席いただきたくご案内申し上げます。なお、出欠のご返事は、10月30日（火）までに事務局あてにお寄せ下さい。

東北大学教育学部関東地区同窓会会長　星　永揚

記

●開 催 日　平成24年11月16日(金)　18時30分より
●会　　場　麗澤大学東京研究センター

（詳細は2ページをご覧下さい）

ご挨拶

「教育学研究科・教育学部の新たな挑戦」

東北大学教育学部同窓会会長
教育学研究科長
本郷一夫（教育心理　'76年卒）

平成二十四年四月より、教育学研究科長・教育学部長を務めることになりました本郷一夫です。皆様、よろしくお願いいたします。

教育学研究科では、現在、昨年度から取り組んでいる二つの事業をより発展させ、新たな課題の解決につながる成果を生み出すことに力を入れています。

一つは、概算要求特別経費で採択された「アジア共同学位開発プロジェクト」（AJP：Asia Joint-degree Project）です。このプロジェクトでは、東アジアの教育課題に対応できる指導的人材の養成をするために共同学位プログラムを開発することを目指しています。具体的には、東アジアを中心に据え、①その教育の現状を的確に分析できる教育研究者、②その教育課題を認識し、教育現場で教育実践を担うことができるリーダー教員、③世界の教育改革を視野に収め、政策立案に携わることのできる教育行政関係者、などの人材を養成しようとするものです。

二年目に当たる本年度は、日本・中国・韓国・台湾の大学院生が共に学ぶサマーコースを開設しました。また、授業担当の教員集団も、日本（東北大学・九州大学）、中国（華東師範大学・南京師範大学）、韓国（ソウル大学、高麗大学）、台湾（国立台湾師範大学・国立政治大学）から構成され、「アジアの子ども」「アジアの学校」の二科目について英語による授業を実施しました。

もう一つの取り組みは、平成二十三年十一月に設立した「震災子ども支援室」の取り組みです。震災子ども支援室は、ある篤志家の方からの寄付（総額一億二千万円）をきっかけとして設立され、主として東日本大震災で親を亡くした子どもさんへの心理的な支援を行うことを目的としています。現在は、室長を含めて心理士三名と保健師一名の体制で支援に当たっています。「時間の流れの中での支援」「関係の中での支援」を重視し、十年間に渡り、同じ心理士が、子どもと子どもを取り巻く人々への支援を継続的に行うことにしています。現在は、フリーダイヤルによる電話相談、被災地の里親サロンへの参加、震災に関わる専門

第12回 東北大学教育学部関東地区同窓会・懇親会

①日　　時　平成24年11月16日(金)18時30分より　(18時受付開始)
②会　　場　麗澤大学東京研究センター
③総　　会　18時30分
④講　　演　18時50分　★講師　佐藤　門哉氏(教育社会、'64年卒)
　　★演題　「3・11東日本大震災の報告―南三陸町から」
⑤懇 親 会　19時30分　(於「三国一」：麗澤大学東京研究センター同ビル地下)
⑥会　　費　5,000円(当日受付にてお支払いください)
⑦申　　込　10月30日(火)までに、同封の返信用ハガキで出欠をお知らせください。
⑧問 合 せ　同窓会事務局　鬼　宗久　TEL 03-3944-0450　FAX 03-3944-4132

インフォメーション

☆講師・佐藤　門哉氏のプロフィール

1941年宮城県生まれ。1964年東北大学教育学部教育社会学科を卒業後、「東北肥料株式会社」(現在のコープケミカル)に入社、常務取締役を歴任される等企業人として活躍。2003年9月、「第二の人生を故郷(元宮城県志津川町：現南三陸町)の発展に貢献しよう」、と思い立ち退社し帰郷。翌年2月の町議選ではトップ当選、その後、町長選へ挑戦する等、旺盛な郷土愛と行動力の持主です。昨年の東日本大震災で被災後は、毎月東京と南三陸町を往復、故郷の復興活動に奔走する生活を過ごしておられます。

☆会場・麗澤大学東京研究センター

麗澤大学東京研究センターは、新宿副都心の新宿アイランドタワー4階にあります。

所在地：東京都新宿区西新宿6-5-1　新宿アイランドタワー4階
電　話：03-5323-6196
アクセス：JR新宿駅西口より徒歩8分。東京メトロ丸の内線西新宿駅下車すぐ上。
地図は大学のＨＰhttp://www.reitaku-u.ac.jp/ 交通案内にあります。

職に対する心理的支援、各種研修会の実施などを行っています。

これら二つの取り組みは、「ワールドクラスへの飛躍」「東北復興の先導」という里見東北大学総長が掲げる東北大学の目指すべき二つの方向性とも合致するものです。

教育学部・教育学研究科における国際化、東北の復興にはまだ時間がかかるところもありますが、これらの取り組みを積極的に進めていきたいと考えています。どうか今後とも同窓会の皆様の協力とご支援をよろしくお願いします。

教育学部の現状紹介

「教育と人間について考える」を目標に、人間形成の場としての教育、制度としての教育を歴史的・現実的に考える、成人の学習の場は、学習はどのように身につくものなのか、心理とは、障害とは何かを考える等、幅広く教育を追及・学習しています。

◇入学定員　70名

◇募集人員　AO入試Ⅲ期10名

一般入試前期60名

2年次後期から、教育学コース、教育心理学コースを選択し、多様な演習を含む専門科目を学習します。

卒業後は、多方面に進出し、活躍しています。

情報出版・教育・学習支援業	32.0%
製造業	20.0%
各種サービス業	20.0%
金融・保険業	12.0%
その他	16.0%

（東北大学案内2013年版より）

「震災後の教育復旧に思う」

東北大学教育学部同窓会仙台支部長　渡邉　宣隆（学校教育　'68年卒）

大震災後の11月21日の総会で阿部先生の後任として支部長に就任致しました。総会当日は星会長にも参加頂きお見舞いとお励ましを頂き関東地区の方々の支えを強く感じました。

東日本大震災は日本の歴史上稀有の大災害となり我が国の社会と人々の意識に大きな影響を与えました。一年半後の今なお復旧の目途が立てられない状況が続き、人々の安寧の心が定まりません。そのような中、一途一心に前に進もうとされている方々が数多くいます。復旧復興への施策の遅さにイライラし不平不満や愚痴等、その日その日を雑然・漫然と過ごす事の愚かさを教えてくれています。ことある毎に湧き起こってくる不平不満や愚痴こそが人間を滅ぼす天敵だと言った方がいました。天敵の対極にある感謝こそ人間という生命体を健やかに成長させる根幹でしょう。人は陶冶次第です。教育の重みを改めて考えさせられると同時に教育学を学んだ者として教育復旧復興にどう係るべきかという課題を突き付けられた思いです。

被災した学校の再開に努力した現場の方々、被災した子供たちの教育環境を整備提供した他校の先生方、それを支えた保護者や地域の方々、行政の奮闘ぶりを見るにつけ、仙台支部として大学の教育復旧復興施策展開のための連絡拠点づくりなどでお手伝いする等子供達のためになる活動ができたらと愚考しています。しかし、若い会員不足が悩みです。貴同窓会のご支援を願い併せて益々のご発展を祈念いたします。

「講師・佐藤門哉氏のご紹介」

東北大学教育学部関東地区同窓会副会長　堀籠　英夫（教育社会　'61年卒）

佐藤さんは、東北大学教育学部・教育社会学科を卒業後、現在のコープケミカル株式会社（東証一部上場会社）に入社し、在任中は常務取締役としてご活躍されました。

同社退任後は故郷の発展に貢献したいと、予てからの思いを実現するために故郷（旧志津川町＝現在の南三陸町）に帰り、町会議員に立候補し見事TOP当選を果たし、町会議員を務められました。とかく、議員になるためには地盤とカバンが不可欠と言われる中、多分地盤もカバンもあまり豊富でない（？）中で、町民の期待を担いTOP当選を果たされたのには、佐藤氏の故郷復興に対する見識と実行力があったからだと思われます。

町会議員任期満了後、町長選に立ちましたが、僅差で現職の町長に敗れ、その翌年に南三陸町はあの大災害にみまわれたのです。多数の町民の犠牲者、それに町役場の職員も多く犠牲となられました。最後まで、町民に避難を呼びかけ、亡くなられた女子職員のニュースは広く日本国民の知るところです。

佐藤氏がもし町長に当選し、災害時に首長であったら、結果はどうなっていたでしょうか？

（現在の体育会系町長と実現しなかった非体育会系佐藤門哉氏の違い）リーダー論の勉強会で何時も引き合いに出される新田次郎作「八甲田山死の彷徨」が思い出されます。危機に直面した場合のリーダーの役割の重大さ、またそのリーダーシップの結果の差の大きさ。

佐藤氏のご講演から考えさせられる点が、多々あることと思います。

「三・一一東日本大震災の報告」

佐藤門哉（教育社会64年卒）
宮城県南三陸町在住

1 南三陸町の地勢・自然

南三陸町は宮城県の北東部、石巻市と気仙沼市の中間に位置します。仙台市から約90㎞。平成17年10月、志津川町と歌津町が合併して誕生した町です。

東は太平洋に面し、三方を標高三百～五百メートルの山に囲まれており、海山が一体となって豊かな自然環境を形成しています。また、沿岸部はリアス式海岸特有の豊かな景観を有し、南三陸金華山国定公園の一角を占めています。

2 大震災の概要

発生日時―平成23年3月11日（金）
震源地―北緯38度、東経142・9度
　深さ8㎞
マグニチュード―9.0
震　度―6弱
津波の高さ―6メートル
　（後で10メートルとの訂正）

3 大震災の体験報告

三・一一当日、私は志津川の自宅にいました。午後十四時四十六分、物凄い大きな揺れが五分位続きました。三陸地方では「地震があったら津波の用心」と言われており（石碑がある）、大津波の襲来を直感しました。

その後、町の防災無線放送で「只今の地震は震度6弱、津波の高さは6メートル」と放送がありました。

五十一年前の昭和三十五年五月二十四日（当時大学一年、会館生）、チリ地震による大津波が発生し、志津川町では四十数名の死者を出し、更に家屋の流失など大きな被害を受けています。そのため、五十年にわたり、町の復興と安全安心のまちづくりのため、水門や防潮堤、防波堤の、建設などに、多額の資金を投じてきました。私は防災無線放送を聞き、津波の高さが六メートルなら、水門と防波堤でストップできると思いました。

しかし、大きな津波が押し寄せると判断し、携帯電話とデジカメを持参して、自宅裏の高台（海抜二十メートル）に避難し、志津川湾の状況を見ていました。

大地震から三十分過ぎた頃、海岸に牡蠣の養殖いかだが押し寄せるのが見えた瞬間、大津波が水門を越えた途端、土煙が立ちのぼり、家、家が将棋倒しのようにバタバタ倒され、アッと言う間に、街中が海と化してしまいました。

私の家は海岸から約一キロメートル離れていましたが、自宅が水没するまで三分位でした。私の居た高台まで海水が押し寄せてきたので、さらに奥の神社へ逃げ、避難しました。

大津波襲来から一時間後、志津川小学校が避難場所に指定されたとの連絡を受け、移動し、一夜を明かしました。電気がつかず、ストーブも無く、寒い夜でした。

翌朝、高台から見た志津川の市街地は五階建ての鉄筋コンクリート造りの病院、警察、イベントホールなどが残っていましたが、木造造りの家はすべて流失し、一軒も残っていませんでした。我家も跡形がなく流失していました。

南三陸町の役場は流され、町の防災庁舎に避難した多くの職員が殉職（三十九名）したこともあり、まさに、南三陸町は行政を始めとして、病院、警察、消防などの機能を失い、町は壊滅状態に陥ってしまいました。

一週間ほど避難所で過ごした後、災害支援のトラックに乗せてもらい、上京しました。四月以降、東京と南三陸町を行ったり、来たりして、「南三陸町震災復興町民会議」に参画するなど、故郷の復興に向けての活動を続けています。

町の産業は、漁業と水産加工業の復興なくしては考えられません。

それには、漁業を営むための漁船や漁具の手当てが必要と考え、八月十七日～十九日まで、函館に行き、中古船の譲渡について、調査をしてきました。その状況は八月二十五日（木）朝、「NHKのおはよう日本」で放送されました。

第二次避難所も八月末で閉鎖され、仮設住宅や賃貸住宅に移り住む事になりました。私は登米郡津山町の仮設住宅（津山町若者総合体育館の隣り）に移りましたが、東京と南三陸町を往復しながら、故郷の復興に微力を尽くす所存です。

故郷の復興には長い期間を要するものと思いますが、皆様のご支援とご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

「上の山公園から見た南三陸町中心部」
〈平成24年5月14日撮影〉

4 南三陸町の被害状況

（九月十九日現在）

死　者―五百六十体
行方不明―六百名
住宅全壊―三千八百八十棟
（全体の約七十二％）
仮設住宅―二千二百戸
人　口―一万五千七百名
（二十三年二月末、震災前一万七千七百名）

「一年後の同場所（瓦礫は片付いたが・・）」〈平成24年5月14日〉

「震災直後の市街地（志津川病院方面）」〈平成23年5月17日〉

「震災のシンボル：防災庁舎跡」（ここで町職員他42名殉職）〈平成24年5月14日〉

同窓生の声

「二十年目を迎えて」

北島　善夫（心身障害学　'85年卒）

私は一九八一年度に入学し、十二年間東北大学にお世話になりました。その後現在の職場に赴任し、千葉大学教育学部の教員として二十年目を迎えています。

特別支援教育教員養成課程（旧養護学校教員養成課程）で障害児心理学を担当してきました。専門分野は、「重症心身障害」と呼ばれる最も障害の重い子ども達の、コミュニケーション発達です。自分の専門分野を話す講義では思わず力が入ります。空回りして虚しさを感じることもありますが、楽しく講義しています。

皆さんもご存知のように、障害児教育は「特殊教育」から「特別支援教育」と呼ばれるようになり、この十年間で大きく変わりました。それに伴い、「発達障害」と呼ばれる子ども達やその保護者との関わりが増えてきました。具体的には、保護者が主宰する指導会の運営に協力したり、教育相談に応じたり、通常の小中学校のケース検討会に助言したり。今では、発達障害関連の仕事が半分位のウェイトを占めています。

当初、病棟で「寝たきり」と呼ばれる子どもを専門にしてきた私にとっては、通常学級で不適応を起こしている発達障害の子どもの問題は、全く別世界でした。教育相談で特別支援学級へ学籍を移すことを保護者に勧めると、「先生、あそこに行ったら、帰って来れないんです。」と言われたり。保護者との初回面接では、「私の子は普通の子なのに、なんで障害児の専門の先生が面接するのですか?」と言われたり。戸惑うことばかりで失敗も沢山してきましたが、それだけに考えさせられることも多く、今では大きな財産になっています。

私は「重症児教育こそ教育の原点」と講義してきましたし、今でもその想いは変わりません。しかし、発達障害と関わる中で、「障害」とは?、彼らにとって「教育」とは?等と、根幹に関わる考えを問い直させられてきました。答えは簡単には見つかりませんが、問い続けていくことが課題だと思っています。

「共存化の喜び」

野村　正宣（教育心理　'89年卒）

八月末に恒例の「高校生クイズ」というTV番組を目にした。新聞の番組欄には「今夜、知力の甲子園で最も頭の良い高校決定／東大合格者No.1開成VS京大合格者No.1洛南／野田首相母校・船橋VS知力なでしこ横浜雙葉&浦和一女が大躍進／灘&ラサール&慶応も…」といったキャッチコピーが記されていた。こうした番組が依然として大真面目で放映されているのか、と思った。中身を見れば、複雑高度な計算問題をやってのけたり、こんなことまで知ってるのかといった博学ぶりの連続で驚嘆した。ただ、これをもって「最も頭の良い」としてよいのだろうか。

今年の夏、私の勤める東洋英和女学院高等部の高校生三人が、国際協力NGO・ACEF（アジアキリスト教教育基金）の実施するバングラデシュへのスタディツアーに参加した。本校は一二八年前にカナダ人婦人宣教師の働きによって創立した学校であるが、当時のカナダ人からの助けを思い起こし今度は私達が今

助けを必要としている子供たちの為にできることをしようということで生徒会を中心に「バングラデシュに寺子屋を」の運動に参加している。レンガ校舎の学校一校を建てることに繋がり、現地の子供達との交流を通して草の根の国際支援・協力を学ぶ機会となっている。現地に行って見て寄り添って「知る」ことは実に多い。前段で示した「知る」ということと、「知る」の意味するところの何という違いか。参加した生徒たちは「知る」ということで競おうとはしない。友人に伝えシェアしようとはするが。

三・一一大震災後の若者の教育はどうあるべきかが問われている。自分自身で実感する「喜び」が、今まで通り他より抜きん出て優越を感じることからのものであり続けてよい筈はない。自分と異なる境遇にある者と同じ地平に立てた、繋がれたというところに生ずる「喜び」を目指すように促さねばならない。差異化による「喜び」ではなく共存化に根差した「喜び」である。

「思うがままに」

石森　ミネ子（学校教育　'68年卒）

同窓会の皆様には、社会状況の変化はあっても、それぞれの年代に応じ、自己のベストを尽くされ、充実した日々を送っていることとご推察いたします。

私は現在六十六歳。三十歳過ぎに宮城から東京の教員になって二十九年、江戸川区西小岩小学校を最後に退職。その後東京都教職員研修センターで教師道場の開設時から関わりおかげで、神津島や市部を含め、都内の各小・中・特別支援学校を、訪問することができました。

教師道場は、自ら研鑽することを望み、実践をもとに授業力を磨く主旨ですから部員は意欲旺盛。助言者を中心に組織されたパワフルな研修の場でした。センターを辞めた今も、あれこれ接点があるのは嬉しいです。

現在の生活の基本は、二つです。

ひとつは、心身の健康を維持する努力。好きなこと（書や美術館巡り）をしてリフレッシュしたり、筋トレで体を鍛えたりしています。

二つ目は、ボランティア活動（人権擁護委員）です。区内のイベントの手伝いや法務局で電話や手紙での相談をしています。担当は子ども人権ですから、子どものおかれている様々の状況が、ストレートに反映します。何としても解決しなければならないのは、虐待といじめ問題です。同じ人権の仲間が、積極的に学校との接点を作ったり、里親になったりと、具体的な活動をしているのを目の当たりにして、自分ができることを一つでも続けたいと思っています。

〝思うがままに〟を信条として・・・。

最後になりましたが、皆様のご活躍と同窓会の発展を、心から祈念しております。

「想いのかけはしに」

長沼　真吾（教育行政　'88年卒）

初めまして、幹事の長沼と申します。二十数年前に東北大学教育学部を卒業し、現在は、教育関係の会社に勤務しております。

さて、少し前のことになりますが、団塊世代の大量退職が社会的に大きな問題になりました。「二〇〇七年問題」です。多くの企業・団体において、新卒他の大量採用を行い、事無きを得たと認識しておりますが、果たしてどうだったのでしょうか。

仕事の関係で学校を訪問することがありますが、都市部の小学校では、全教員の八割が新卒五年未満という状況も珍しくありません。これは、前述の団塊世代の大量退職によって生じた現実です。先生方は、子どもの見取り方法や教科指導、あるいは校内業務等多くの事を校内のベテランの先生方から学んでいました。ところが、急に校内からベテランの先生がいなくなってしまったため、これまで受けつがれてきた教育技術の継承が途絶えようとしています。

退職された先生方の中には、年齢バランスを考えない採用をしてきた行政の責任を非難するのではなく、自らが積極的に学校を訪問して若手教諭を指導し、私的勉強会などを行って、教育技術の伝承に努められる方もいらっしゃいます。

教育学部関東地区同窓会は、東北大学への強い「想い」から、二十四年前に創立されたと伺っております。「会員間の情報ネットワーク」や「同じキャンパスで青春（とき）を共有したもののみが有する共感」という伝統があります。その「想い」を受け継ぎ、伝統を失わないためにも継続的な新規会員の入会が必要です。失ってからはじめて価値に気付くようなことのないように、伝承者として若い世代に諸先輩の「想い」や同窓会の魅力を発信してまいります。

第11期　役員

○印　新任

会長　○星　永揚（社会'66）
副会長　堀籠　英夫（社会'61）
　　阿部　孝（行政'69）
事務局長　鬼　宗久（学校'69）
幹事　田沢　良介（身障'62）
　　今野　正保（学校'66）
　　小玉　幸彦（社会'68）
　　徳田　英明（心理'69）
　　小熊　順子（心理'69）
　　○笹川智恵子（哲学'69）
　　木戸　裕（哲学'74）
　　小林　昭文（哲学'76）
　　藤野　博（身障'84）
　　長沼　真吾（行政'88）
　　奥住　秀之（身障'91）
会計監査　菊谷　邦男（社会'60）
　　高橋　敏行（身障'62）
顧問　江川　亮（心理'55）
　　小林幸一郎（社会'55）
　　菊地　明（学校'55）
　　大曾根良衛（哲学'55）
　　越河　六郎（心理'57）
　　家根　敏明（社会'57）
　　荒木　廣（行政'58）

顧問の藤澤勇様（行政'59）は平成24年3月に逝去されました。心からご冥福をお祈り申しあげます。

●第10期　一般会計収支決算書　（平成20年11月～平成22年10月）

1．収入の部

（単位：円）

科目	A予算額	B決算額	差異（B-A）	摘要
1．維持会費	600,000	846,540	246,540	Ⓐ3,000円×290件（224人、内66人が11期分前納）＝870,000円、Ⓑ手数料23,460円、Ⓐ－Ⓑ 846,540円
2．寄付金	10,000	6,000	▲4,000	
3．雑入	5,000	589	▲4,411	利子
4．繰越金	241,544	241,544	0	第9期収支残
合計	856,544	1,094,673	238,129	

2．支出の部

（単位：円）

科目	A予算額	B決算額	差異（B-A）	摘要
1．運営費	300,000	107,233	▲192,767	第10期役員会・会議費等
2．活動費	400,000	328,001	▲71,999	総会・役員会の準備、「きょうかん」作成等
3．需用費	140,000	98,420	▲41,580	「きょうかん」郵送費、通信費等
4．予備費	16,544	0	▲16,544	
合計	856,544	533,654	▲322,890	

3．第11期への繰越金

収支決算額1,094,673円－支出決算額533,654円＝561,019円

●第11回　総会・懇親会収支計算書　（平成22年11月19日開催　於麗澤大学東京研究センター・三国一）

（単位：円）

(1)収入の部			(2)支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
総会・懇親会費	180,000	5,000円×36人	会場費・宴会費	190,000	「三国一」支払い
雑入	58,612	一般会計より	謝礼・手土産等	48,612	講師・来賓へ
合計	238,612		合計	238,612	

●第11期　収支予算　（平成22年11月～平成24年10月）

1．収入の部

（単位：円）

科目	第11期予算額	第10期予算額	対前期増減	摘要
1．維持会費	450,000	600,000	▲150,000	3,000円×150人
2．寄付金	0	10,000	▲10,000	
3．雑入	5,000	5,000	0	利子等
4．繰越金	561,019	241,544	319,475	第10期収支残（11期前納者66人分含む）
合計	1,016,019	856,544	159,475	

2．支出の部

（単位：円）

科目	第11期予算額	第10期予算額	対前期増減	摘要
1．運営費	300,000	300,000	0	第11期役員会・会議費等
2．活動費	400,000	400,000	0	総会・役員会の準備、「きょうかん」作成等
3．需用費	150,000	140,000	10,000	「きょうかん」郵送費、通信費等
4．予備費	166,019	16,544	149,475	
合計	1,016,019	856,544	159,475	

【第11期の活動方針】

会員相互の親睦と交流を本旨とし、本会の一層の充実・発展をめざし、会員の意見、提案を反映させる「会員参加の同窓会」を運営の基本とする。この趣旨にもとづき、会員の理解と協力を得ながら、次の活動を堅実に継続推進する。

(1)会員交流の拡充
(2)会報「きょうかん」の発行
(3)第12回総会・懇親会の開催
(4)東北大学教育学部同窓会、東北大学萩友会との連携
(5)その他

きょうかん 第11期（平成22年11月～平成24年10月）維持会費協力のみなさま

納入ありがとうございました。（165名、敬称略、卒業年度順）

【教育哲学　15名】
大曽根良衛　上條信治
沼田裕之　若林　滋
伊藤忠篤　笹川智恵子
鈴木重男　木村俊二
戸張嘉勝　木戸　裕
小林昭文　小林洋子
奥村　寛　高松典子
治部　樹

【教育社会学　42名】
小林幸一郎　家根敏明
長谷川嵩　野原忠博
太田武久　菊谷邦雄
大野　忠　石塚米子
堀籠英夫　槙　正幸
北森義明　吾田壹明
杉浦洋一　西村孝雄
浅野　勉　池田　公
中林勝男　阿部　実
星　永揚　佐久間孝正
塩入　肇　巽駒太郎
小玉幸彦　斎藤貞夫
薄木正雄　野島節子
藤澤美姫子　北舘博人
市塚　守　佐々木昭美
佐々木博　津吹　茂
今野俊治　井腰伯子
上羅　廣　菅谷　清
佐々木浩　佐々木牧子
田崎正紀　沼尾立子
飯野健児　鈴木英一

【教育行政学　37名】
赤間啓介　加納正巳
荒木　廣　木村正次
須貝幸雄　清水俊雄
徳江　明　藤澤　勇
川島春夫　佐倉三雄
五味渕勇一　斎藤哲至
田中惇夫　新井雄啓
佐藤　全　稲葉雅彦
高橋靖直　望月　久
小林順子　青木　進
阿部　孝　熊谷　晃
芦澤　薫　加藤正彦
福田昭夫　鈴木健一
廣池幹堂　増渕　実
浅野良一　高橋寛人
高橋俊文　原　祥子
小澤恵子　森　賢一
寺内　誠　田中愛智朗
長沼真吾

【教育心理学　27名】
江川　亮　越河六郎
磯部裕子　関根正喜
奥泉英夫　斎藤忠志
位田尚隆　黒住ひろ子
大渕雄人　会田元明
菅田美紀子　小熊順子
伏見陽児　出口利定
鷲尾純一　中村美恵子
吉村葉子　伊藤良子
寺島ひろ子　玉井眞理子
野露るみ子　小滝　威
田口有理　吉田恵子
馬場章信　野村正宣
濱田豊彦

【心身障害学　10名】
小原弘三　高橋　哲
高橋敏行　田沢良介
大沼直紀　高橋良彰
北川千鶴子　山森伸子
諏訪幸子　北島善夫

【学校教育学　34名】
板井啓修　及川　元
佐藤邦男　堀内純子
梶原　葉　菊地　明
志子田宣生　辻　寛
熱海光子　渡辺健郎
高橋渥子　中井ちとせ
大金武文　石坂清子
猪又和子　川野恵子
佐々木馨　高橋睦人
村井綏子　渡辺成男
後藤　光　丹野光穂
渡辺登美子　木村益子
今野正保　鈴木保一
相馬敬司　吾妻順子
横舘厚太　石森ミネ子
富永和彦　細谷靖男
吉成　明　鬼　宗久

以上合計165名（平成24年8月28日現在）

事務局から

【お詫びと訂正】
平成23年10月発行の臨時増刊号「同窓生の声」で、学校教育'60年卒加藤万喜子様を真喜子と誤記いたしました。お詫び申し上げ訂正させていただきます。

【会員拡大活動へのご協力を！】
関東支部には、現在492名の方が会員登録されています。専攻毎内訳は、教育哲学42名、教育社会学99名、教育行政学98名、教育心理学100名、心身障害学51名、学校教育学102名。年層別では、若手層の加入率が低く、その拡大が急務です。お知合で未加入の同窓生に、加入をお薦め下さい。加入希望の方を事務局にお知らせ頂ければ会報を送る等フォロー活動をいたします。

編集後記

「きょうかん」11号をお届けいたします。誌名に託された寓意に思いを致し、紙上から母校の発展状況、同窓諸氏の活躍を伺う事で、皆様の活力アップに繋がれば幸いです。

「東日本大震災」から早くも一年半が経過した現在、日本人としてこの災害を風化させることなく、復旧・復興に向け共に歩みたいものです。（星）

第12期（平成24年11月～平成26年10月）維持会費納入のお願い

東北大学教育学部関東地区同窓会は第11期を終了し、第12期活動に入ります。同窓会活動は、会員の皆様からご協力いただいております**維持会費（2年間で3,000円）**により支えられております。第12期もご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

つきましては、同封いたしました「郵便振込票」で**平成24年12月末まで**に、維持会費の納入をお願い申し上げます。

東北大学教育学部関東地区同窓会
会長　星　永揚

●連絡先　事務局　鬼　宗久
TEL　03-3944-0450
FAX　03-3944-4132
メール　onim4771@kkf.biglobe.ne.jp